

濾胞性リンパ腫における t(14;18)(q32;q21)陰性例の染色体異常について

奥村 敦子, 林田 雅彦, 岸森 千幸, 福塚 勝弘, 弓場 吉哲, 小橋 陽一郎
(天理よろづ相談所医学研究所)

濾胞性リンパ腫 (FL)は, t(14;18)(q32;q21)による BCL-2 の高発現が発症に関与しているが, 一部に t(14;18)陰性例が知られている. 今回我々は, FLにおける t(14;18)陰性例の染色体異常について, 検討を行った.

【対象および方法】

対象は 1995年 4月 ~ 2004年 3月までに FLと診断され, 染色体検査が可能であった 57症例を用い, t(14;18)の有無から陽性群 (33例)と, 陰性群 (24例)に分けて, その他の染色体異常の出現頻度を比較した.

【結果および考察】

t(14;18)の陽性群と陰性群で, その他の染色体異常を比較した結果, 構造異常で出現頻度に差を認められたのは, 3q27 転座 (陽性群 :6%, 陰性群 :50%)と 6q- (15%, 35%)であった. また陰性群の中で 3q27もしくは 6q-のいずれかを認められたのは, 15/24例 (75%)であった. その他の構造異常として頻度が高かった 1q0 異常 (24%, 25%), 8q24 転座 (9%, 5%)は, ほぼ同率であった.

数的異常では, +7(48%, 15%)に差を認められたのに対し,

+18(24%, 20%)はほぼ同率であった.

両群で差を認めた 3q27 転座, 6q- は, 陰性群の約 8割に検出でき, BCL-6 遺伝子の活性化や癌抑制遺伝子の欠失など, t(14;18)以外の発症への関与が示唆された.

また, 両群に差を認めなかった 1q0 異常および 8q24 転座は 10~ 25%とやや低頻度であり, FLの発症以外の病期の進行に関与している可能性が考えられた. しかし, FLでの予後因子として知られる +7は, 陽性群に多い傾向を認めた.

【まとめ】

濾胞性リンパ腫における t(14;18)陰性群では, 陽性群に比べ 3q27 転座もしくは 6q- 異常を高頻度 (75%)に認めたことより, t(14;18)以外の発症メカニズムへの関与として興味を持たれた. 一方, やや低頻度で差を認めなかった 1q0 異常および 8q24 転座は, FLの発症以外の病期の進行に関与している可能性が考えられた.

連絡先 : 0743-63-5611